

武士道とは死ぬことと見つけたり

武士道・侍の道」は、武士の態度、行動、ライフスタイルに関する道徳的規範歴史を通じて大きく進化した。

武士道の種類は複数あります。

現代の武士道は、日本の社会経済組織で今でも使われています。

武士道は、武士文化のすべての規範、慣習、哲学、原則の包括的な用語としても使用されます。

これはヨーロッパの騎士道の概念と大まかに類似していますが、大きな違いがあります。

武士道は、初期の武士の道徳的価値観と倫理規定を形式化し、最も一般的には、誠実さ、儉約、忠誠、武道の習得、そして死ぬ までの名誉の組み合わせを強調しました。

江戸時代（1603～1868）の平和の時代に新儒教から生まれ、儒教のテキストに従い、神道や禅仏教の影響も受けながら、武士の暴力的な存在を知恵によって和らげることができました。

忍耐と静けさ。

武士道は16世紀から20世紀にかけて発展し、武士道という用語自体は「前近代文学ではめったに証明されていない」ものの、10世紀にまでさかのぼる遺産に基づいて構築されていると信じる専門家によって議論されました。

この倫理規定は、平安時代の終わり（794年から1185年）に侍のカーストが権力を握り、鎌倉時代の最初の幕府が設立された。

（1185年から1333年）ことで形になりました。

室町時代（よって正武士道は日本の歴史を通じて多くの変化を遂げており、さまざまな日本の氏族が独自の方法でそれを解釈しました。

書かれた用語の最初の使用は、1616年の春日虎綱による甲陽軍鑑にあります。

1642年、カショキ（可笑記、「アミューズメントノート」）武士道千佳森によって書かれ、武士道の理論的側面を説明する道徳的教訓が含まれていました。

アクセシブルな仮名で書かれており、侍ではなく庶民を対象としています。

非常に人気があり、武士道の考え方が人々に広まったことを示しています。[1]榎木は、1642年までに武士道に道徳的価値観が存在したことを示しています。

武士道は、武士が遵守するように要求または指示された道徳的原則のコードです...より頻繁にそれは口に出されて書かれていないコードです.それは数十年と数世紀の軍事的キャリアの有機的な成長でした。

侍になるためには、このコードをマスターする必要があります。

新渡戸稲造はこのように日本の騎士道を記録した最初の人物でした。

30年前の武士は彼の後ろに名誉、服従、義務、そして自己犠牲の法則の千年の訓練を持っていました、

それらを作成したり確立したりする必要はありませんでした。

子供の頃、彼は焼身自殺のエチケットで、確かに彼の初期の頃からのように、指示されなければなりませんでした。

中国の政治家戴季陶は、武士道の歴史的正当性を認め、それは社会秩序の理論として始まったと述べたが、それはかなり進化した。

江戸時代、武士道は倫理理論を表すために使用され、神道に基づいた宗教的概念になりました。

明治時代、武士道はヨーロッパの理想を吸収し、日本の政治倫理の基盤を形成しました。

中国の作家周作人は歴史的正当性を支持しましたが、それは現代では改ざんされ、腐敗していると考えられていました。

武士道は、文字通り「侍の道」を意味する日本語です。

これは、武田氏の功績を記録した軍事記録である甲陽軍鑑（甲陽軍鑑）の1616年の作品で最初に証明されました。

この用語は、武士（武士、「侍」、文字通り「軍隊+人」）、712年に音読みで日本語で最初に証明された中国語由来の単語およびdoの複合語です。

武士はしばしばの同義語として使用されました侍。

17世紀初頭、武士道という用語は、音読みを意味する代替形式（武士道）と一緒に使用され、日本語のネイティブ語彙（特訓読みを使用して読みました。

もう1つの重要な用語は、武士気質、文字通り「侍の気質」です。

何世紀にもわたって、武士は複数の種類のコードに固執し、その解釈は武士の一族ごとに異なりました。

これには、道徳、社会における彼らの役割、名誉と美徳を持って人生を送る方法が含まれていました。

武士にはいくつかの共通の価値観がありましたが、すべての武士が従う必要のある単一の定義や道筋はありませんでした。

侍は他の侍と同じように戦場で実用的でした。

これらの概念、規範、理想は、鎌倉時代（1185~1333）に権力を握って以来、武士に根付いていました。

ある時代には、12世紀から「弓馬の道、幕府の道」などの一般的な規則や書かれていない習慣があり、江戸時代には武士の法典 が特定の美徳で形式化されましたと支配徳川幕府による法律。

著名な武士は、宮本武蔵（1584-1645）や山本常朝（1659-1719）など、武士道の解釈について幅広く書いています。

1870年代に明治維新は武士の階級を廃止し、彼らは専門家、軍隊、およびビジネスの階級に移された。

しかし、元武士とその子孫は重要な地位を占めていたため、日本社会に影響を与え続けました。

武士道は様々なタイプで存在し続けています。

武士道には時代とともに進化するためのコンセプトやアイデアが追加されました。

これは、日本帝国の軍隊で使用され、後継の自衛隊によって象徴的に使用されました。

大正時代、武士道は商人の道として提唱されました。

それは何年もの間休眠状態にあり、地政学的な不安定さの間に復活する可能性があります。武士階級による何世紀にもわたる統治は、日本社会に深い影響を与えてきました。

このように、今日でも日本の文化、ビジネス、武道、コミュニケーションなど、さまざまな形が使われています。

武士道は、武士クラスのすべてのメンバーが従うことを義務付けられた特定の道徳的規範としてしばしば説明されます。

しかし、歴史的に、武士は複数の侍の規範を守り、解釈は武士の一族や時代によって異なりました。

これらの規範と哲学は、さまざまな時期に大きく変化しました。

鎌倉時代（1185年）以来、最も初期のプロト武士道タイプが存在していました。

武士道は日本の騎士道と呼ばれています。

どの武士道タイプを騎士道と比較するかによって、顕著な類似点と相違点があります。

キリスト教騎士道の美徳に修正的な影響を及ぼしたが、武士道は禅仏教、神道、儒教の影響を受けた。

武士道は、一般的に新渡戸稲造の武士道：日本の魂の道徳的規範と関連付けられています、彼の本が武士道という用語を国際的に広めたからです。

しかし、それは武士道の他の歴史文学とは異なる武士道のロマンチックな解釈です。

したがって、新戸部によって定義された道徳は、武士道のすべてを表すわけではありません。

一部の研究者は、新戸部（別名明治武士道）によって定義された騎士道武士道は19世紀に発明されたと主張しています。

しかし、鎌倉時代以来、日本の侍の規範、慣習、哲学に関する歴史的文献はたくさんあります。

これらのタイプは、時代ごとに古代、戦国、江戸、明治、現代武士道に分類できます。

したがって、武士道という用語サムライ文化のすべての規範、慣行、哲学、原則の包括的な用語として最もよく使用されます。

武士道は、ひいては日本の侍の道です

武士道になった価値観は、何世紀にもわたって現在に至るまで大きく進化しました。

これらは、12世紀に将軍 源頼朝と共に書かれていない習慣として最初に登場しました。

武士道という用語は、武田氏の軍事的搾取の説明である、およそ1616年頃の甲陽軍鑑に最初に登場しました。

]武士道は、戦闘での勇気に完全に専念することから、道徳的誠実さにもっと関連する洗練されたタイプに進化しました。

武士は、歴史の各時代に異なる種類の武士道を持っていました、戦場および社会における要件の変化を反映しています。

武士道の種類を表すには、時代名を使用する必要があります。

最初の適切な日本の中央政府は700年頃に設立されました。

日本は貴族の官僚的な支援を受けて天皇によって統治されました。

彼らは次第に武装した召使いである侍の支配を失いました。

侍は「古英語のcniht (knecht, knight) 、guardsまたはattendants」に似ています。

12世紀半ばまでに、武士階級は支配権を握っていた。

武士は将軍を将軍として19世紀半ばまで日本を統治していました。将軍はもともと天皇の軍の副官でした。

武士道の出現は、封建制の日本と、12世紀の源頼朝（1147-1199）の時代の最初の将軍の出現と関連しています。

武士道は、14世紀から15世紀にかけて、武士道の文化や物語や軍事条約のランドマークに徐々に現れてきました。

このように、日本文化におけるその古代の現代的表現とその普及の永続性が注目されている。

10世紀と11世紀には、腕の道（諏訪門の道）と弓矢の道（キュウセン/キュヤノミチ）がありました。

源頼光（1180～1185）当時は「弓馬の道」と呼ばれていました。

当時の侍のために戦い、それは伝統的な方法と考えられていたため、聖徳太子、源頼光、源義家（八幡太郎）などの最古の武士の英雄の方法でした。

ルイス・フレデリックによると、きゅうばの道は、武士が従うことが期待されていた一連の規則と書かれていない慣習として10世紀頃に登場しました。

ゆみやとるみのならい」もありました。[1]これは、日々の訓練と戦争の経験から発展した理想的な侍の行動の新たな感覚があったことを示しています。

10世紀から11世紀にかけて、武装の道（諏訪門の道）、弓矢の道（キュウセン/キュヤノミチ）、弓の道、馬（きゅうばの道）。

これらの 表現は、武士道の祖先である慣習を指しますが、道徳との関係を意味するものではありませんでした。

これらは実際の戦闘のための訓練に焦点を合わせた実践に過ぎず、したがって広い意味での武士の生き方と関係がありました。

中世（12世紀から16世紀）に発展した侍の世界は、]仏教の支配下に置かれました。

仏教は、生物を殺すことの禁止をその主要な原則の1つにしています。

死に直面して、一部の武士は自分たちが悪いカルマを受け継いだと思った。

他の人は自分たちが悪を行っていることを知っていた。

仏教の無常の概念（無常）は、存在の脆弱性に特定の意味を表現する傾向がありました。

阿弥陀如来の浄土への信仰により、一部の侍は阿弥陀如来の楽園を期待することができました。

生と死の一体性の教義を持つ禅仏教も多くの武士に高く評価されていました。

中世の侍の世界は、依然として大部分が超自然的なもの、特に信念によって支配されている宇宙のままでした。

戦闘で倒れた侍の苦しめられた魂の中で（誰が）生きている夢の中でほとんど執拗に戻ってきました。

この考えはまた、能楽堂の成功を確実にしました。

平家物語は、源氏と平氏の2つの強力な武士の戦いで、源氏戦争（1180～1185）の理想的な物語を描いています。

叙事詩全体にはっきりと描かれているのは、栽培された侍の理想です。

近世の間に、これらの理想は侍社会の上層部で精力的に追求され、日本の武装勢力の適切な形態として推奨された。

神道、仏教、道教、儒教が武士道の初期の発展に及ぼす影響は、武士道を宗教的に尊重する人々に浸透しました。

日本の初期の文学作品の多くは侍について語っていますが、武士道という用語は江戸時代までテキストに登場しません。

武士道となるコードは、日本の鎌倉時代後期（1185–1333）に概念化された。

鎌倉幕府の時代から、「侍の道」は日本文化の不可欠な部分でした。

学者たちは一般に、中世以来、近代以前の日本を「侍国家」と見なしている。

武士は中世以来、社会のロールモデルでした。

儒教に従って、彼らの義務の1つは、社会のロールモデルとしての役割を果たすことでした。

彼らは武道のスキルと、文学、詩、茶道などの平和的な業績とのバランスを取りました。

中世の日本のことわざ花はさくらぎ、ひとはぶし（日本語：花は桜木人は武士、文字通り「[最高の]花は桜であり、[最高の]人は侍である」）など。

1843年、中村は次のように述べた。

私たちの国は武器の国です。

西の土地[中国]は文字の国です。

文字の国はペンを大切にします。

武器の国は剣を大切にします。

それが最初からのやり方です。

私たちの国と彼らの国は何百マイルも離れており、私たちの習慣は完全に異なり、私たちの人々の気質は異なっています-

では、どうすれば同じ方法を共有できるでしょうか？

室町時代（1336～1573）、武士の道は、武道、禅瞑想、絵画（モノクロ風）、生け花、茶道、辞世などの詩とともに、日常生活に取り入れることで洗練され始めました。

自殺の使命や戦いの前に武士によって書かれた）と文学。

カール・ステーンストラップは、13世紀と14世紀の著作（軍記物語）は、「武士をその自然の要素である戦争で描写し、

無謀な勇気、激しい家族の誇り、そして時には無意味な主人と人間の献身などの美德を称賛した」と述べました。

秀吉が1588年に全国的な「刀狩り」で武器を没収するまで、すべての農民は基本的に侍でもありました。

すべての足輕は、琵琶法師から戦争の精神についての最初のレッスンを受けました。

一方、平家の朗読は、忠誠心、逆境への不動、家族の名誉の誇りなど、市民の美德も広めました。

加藤清正（1562～1611）や鍋島直茂などの戦国時代の家臣や武将の言葉は、日本が比較的平和な時代に入った16世紀の変わり目に一般的に記録または後世に伝えられました。

「ランクに関係なく、すべての武士」に宛てたハンドブックで、加藤は次のように述べています。

「武道の事柄を日々調べなければ、勇敢で男らしい死を迎えることは難しい。

そのため、この侍の業を心に刻み込むことが不可欠だ」と語った。

加藤は、詩の朗読さえも禁止した凶暴な侍であり、次のように述べています。

「学問に多大な努力を払うべきである。

軍事問題に関する本を読み、忠誠と親孝行の美德だけに注意を向けるべきである。

侍の家に生まれたので、自分の意図はすべきである。

長い剣と短い剣をつかんで死ぬことだ」と語った。

鍋島直茂（1538 – 1618）も同様に、階級を問わず、戦場で命を落とさずに死ぬのは恥ずべきことであり、「武士道は狂ったように死ぬ。

しかし、直重は「下層階級で知られているように、誰もが個人的に運動を知っているべきである」と示唆している。

16世紀半ばまでに、日本で最も強力な武将の何人かは、京都朝廷の衰退する力の中で領土の覇権を争い始めました。

1573年に織田信長が京都を占領したことで、室町時代は終わりました。

西暦1551年、日本を訪れた最初の西洋人の1人は、ローマカトリックの宣教師 フランシスコザビエルでした。

フランシスの説明は、名誉、兵器、戦争が日本文化において最も重要であると評価されたことを示しています。

日本人は名誉と区別に非常に野心的であり、軍の栄光と勇気においてすべての国よりも優れていると考えています。

彼らは戦争に関係するすべてのもの、およびそのようなすべてのものを賞賛し、尊重します、そして金と銀で飾られた武器ほど彼らが誇りに思っているものはありません。

彼らはいつも家の内外で剣と短剣を身につけ、寝るときは寝台の頭に吊るします。

要するに、彼らは私が今まで見たどの人よりも武器を大切にしています。

彼らは優れた射手であり、国には馬が不足していませんが、通常は徒歩で戦います。

彼らはお互いにとても礼儀正しいですが、彼らが完全に軽蔑している外国人にはそうではありません。

彼らは武器、身体の装飾品、そして多くの付き添いに彼らの手段を費やし、そして少なくともお金を節約することを気に

しません。

要するに、彼らは非常に好戦的な人々です、そして彼らの間で継続的な戦争に従事しました。

最も大きな揺れを支える最も強力な腕。彼らはすべて1つの主権を持っていますが、過去150年間、王子たちは彼に従うことをやめました。

これが彼らの永続的な確執の原因です。

敵の頭を斬首して集める習慣は、武士の文化における名誉の一例です

斬首された頭は、彼らが欲しがっている敵を殺し、報酬を集める証拠として将軍に示された。

頭が多いということは、名誉、名誉、報酬が高いことを意味します。

斬首された頭の大黒と呼ばれる美化の儀式が行われた。

敵の頭がテーブルの上に配置され、侍の前に提示された。

間違いを防ぐために、すべての頭が識別され、印しが付けられました。

警護兵は将軍の左右に配置され、敵の悪魔の精霊をトランスフィックスするための呪文を引用しました。

それから侍は自分の名前を言い、斬首された頭を見せて説明するために箱を持ち上げた。

将軍は扇を持ってトロフィーの頭を調べ、死者が彼の顔を認識できないようにした。

主張された頭が正しければ、侍は支払いを受け取り、そうでなければ彼は罷免された。

この時代の戦争で荒廃した頂点と江戸時代の誕生にもかかわらず、武士の行動規範は戦争の領域を超えて広がり続けました。

武士道に関連した禅仏教と儒教の形態もこの時期に出現しました。

武士道のような規範を守る武士は、公正で倫理的な社会生活を送ることが期待されていた。

軍事作戦がない場合の紳士の慣行を尊重する。

日本は江戸時代（1600年から19世紀半ば）に2世紀半の比較的平和を享受しました。

日本には国内紛争も国際紛争もありませんでした。

徳川社会のこれらの平和な時代は、武士道を戦いの勇気への焦点からより道徳的な誠実さへと洗練することを可能にしました。

徳川幕府（1603–1867）は、武士の価値観の側面を体系化し、日本の封建法の一部に形式化しました。

武家諸法度は1615年に政府によって発行され、武家諸法度（大名）と武家の貴族の責任と活動、行動の規則、シンプルでまともな服装、公式訪問の場合の正しい供給を規定しました。

勅令は、1629年と1635年に徳川家光によって発されました。

新しい命令は、幕府の権威と支配を主張したいという願望を明らかにしました。

武士の剣術技能は、人格形成の武道に発展した。

この期間中、武士階級は国の保安と行政において中心的な役割を果たしました。

この時代の武士道文学には、武道のより一般的な応用と平時の経験を求める侍のクラスに関連する多くの考えと、土地の長い戦争の歴史についての考察が含まれています。

武士道という用語の最初の言及は、武士の春日虎綱（1527–1578）によって1616年頃に書かれた（武士流）の甲陽軍鑑（甲陽軍鑑）にあります。

武士道について30回以上言及している20巻の巻物で構成されています。

武田家の歴史とその軍事戦術が含まれています。

甲陽軍鑑は、戦闘における勇気と悪用について説明しています。

武士道は「槍として」にのみ存在することを強調します。

甲陽軍鑑（1616）では、武士道は個々の戦闘の生存技術であり、武士の名前を上げることによって、自己と一族の発展を有利にすることを目的としています。

また、藤堂高虎（1556–1630）の故人の回想録にあるように、彷徨うことを称賛する藩主を求めていると断言している。

朝倉宗滴に象徴されるように（1477–1555）、「侍は獣または犬と呼ばれるかもしれませんが主なものは勝つことです。」冷淡な哲学も盛り込まれているのが特徴です。これらは主に武士としての生き方に関係しており、各家の教えであり、家臣の扱いにも相当します。

ウィルコック・ヒロコ博士（オーストラリア、グリフィス大学上級講師）は、甲陽軍鑑は武士道の武士道としての概念と武士の伝統の価値観を提供する最も初期の包括的な現存する作品であると説明しました。

ただし、「真」または「偽」と見なされる一連の原則はなく、さまざまな世紀を通じて手ごわいと広く見なされているさまざまな認識があります。

トーマス・クリアリーが強調した「儒教、仏教、神道はそれぞれさまざまな学校に代表され、3つすべての要素は日本の文化や習慣で一般的に組み合わせられていました。

武士道はそれに応じて多様であり、選択的に利用されています。

侍の精神と規律を明確にするためのこれらすべての伝統の要素」。

江戸時代の元和（1615～1624）以降、哲学者・儒教者の山鹿素行（1622～1685）らが説明しようとした「紳士の道」（志度）の概念が新たに確立された。

儒教の朱子学派の道徳におけるこの価値。山鹿素行は、初めて儒教の倫理（名誉と人間性、「親孝行」など）が武士に求

められる規範となった。

山鹿素行は、20世紀初頭の日本では「武士道の賢者」と広く見なされていた。。

武道学者の小笠原作雲は、1621年に武術について「書の兵役」と呼ばれる20巻を編纂した。

巻物は、武士道の本質を、報酬や権力に屈することなく、自分の内なる原則を支配する個人的な信念に固執する強さとして説明しています。

1642年、カシヨキ（可笑記、「アミューズメントノート」）は、（斎藤親盛、1603-1674）（山形藩の最上氏の元家臣）によって書かれ、出版されました。

千佳森のペンネームは斎藤親盛（如備子）でした。

かしよきは、道徳的教訓を持った武士の知識、儒教の教え、儒教の教えなど、幅広い内容の5巻です。

武士道の理論的側面を説明する道徳的教訓があります。

5番目の巻物には、武士によって作成された重要な定義があります。

したがって、武士道と武士道の精神における道徳の最初の既知の記述は、カシヨキでした。

武士道の本質は、嘘をつかない、不誠実、卑劣、表面的、貪欲、失礼、自慢、傲慢、誹謗中傷をしないことです。

不誠実であったり、仲間と仲良くしたり、出来事に過度に関心を持ったり、お互いに関心を示したり、思いやりを持ったり、強い義務感を持ったりしないでください。

カシヨキは、一般の人々の間で武士道の精神を広める上で重要でした。

したがって、それは侍ではなく、庶民のために書かれました。

小学校の読解力のある人が読める漢字ではなく、かな（ひらがなとカタカナ）で書かれているため、そのアクセス性は非常に人気がありました。

成人、青年、女性、世代などの庶民の行動に大きな影響を与えた多くの版がありました。

剣豪宮本武蔵の生涯は武士道を体現しています。

武蔵（1584-1645）は、1643年頃に五輪書（五輪書）を書いた。

五巻（土、水、火、風、虚空）で構成されている。

大地の書は武士道の一般的な枠組みを説明しています。

あらゆる状況でスキルを適用し、常に2本の剣を持ち、槍、薙刀、弓矢、銃を効果的に使用方法を学びます。

大名は彼の剣技の強さとそれらを適切に配備する方法を知っている必要があります。

方法を習得し、邪悪な行為や考えを避け、芸術やさまざまな職業に関する知識で視野を広げ、客観的な判断を下すための訓練に専念してください。

1685年、菱川師宣（1618-1694）の浮世絵本『古今武士道絵画し』が出版されました。

それは、アートワークごとの簡単な説明で、武士の英雄的な人気のある物語を特徴とします。

タイトルには武士道という言葉が含まれており、それが一般の人々に広まったことを示す子供向けのものでした。

中国の政治家戴季陶（1891-1949）は、1907年に日本大学の法学プログラムに参加しました。

彼は日本語に堪能で、武士道について学びました。

ダイは、明治時代以前の日本の伝統的な封建階級構造のおそらく暴力的な性質を批判しました。

ダイは、侍が階級構造を残酷に利用して、社会秩序の中で彼らの下の人々を虐待し殺害したと述べた（そして中国社会にとって平和を愛するものとして反対を偏って主張した）。

ダイによれば、17世紀に儒教が影響力を持った後、それは残酷な武士を鎮め、近代的で文明的な社会への道を日本にもたらした慈悲と人間性の考えをもたらしました。

ダイはまた、武士の側面を高く評価しました。

たとえば、ダイは次のように述べています。

日本は、自己犠牲、無私の忠誠、そして儒教が導入された後の思いやりの精神から引き続き恩恵を受けました。

ダイは、かつての商人階級が権力を握り、大企業が政府の政策を主導し始めたときに武士の美徳が失われたことによる現代日本の問題（明治維新後）を非難した。

武士道は儒教の慈悲の理想に大きく影響された後、武士道は主人のために無私無欲に血を流し、農民や他の下層階級の人々のために慈悲の涙を流したため、本質的に「血と涙の生活」になったとダイは言いました。

葉隠には、戦国時代の保持者である鍋島直茂（1537-1619）が、直茂の孫である鍋島光茂の元保持者である山本常朝（1659-719）による18世紀初頭の武士道関連の哲学に関する多くの発言が含まれています。

葉隠は18世紀初頭に編纂されましたが、徳川幕府（1867）の終わりまで、鍋島氏の一種の「秘密の教え」として保持されていました。

彼の言うことは、「私は侍の道が死であることを発見した。」「

武士道が成文化した他のすべての名誉と評判に焦点を当てた要約でした。

これは、武士道が死の規範であると誤解されることがあります。

本当の意味は、絶えず死を意識することによって、人々は生と死を超越した自由の状態。「侍としての召しを完全に果たすことができる。

山本常朝の武士道の解釈は、彼のユニークなステーションと経験によって洗練された哲学をよりよく示しており、同時に忠実で反抗的であり、最終的には新興の市民社会の法律と両立しません。

武士道の模範と一般に見なされている47の浪人のうち、常朝は、そのような狡猾で遅れた復讐の陰謀を孵化することを怠ったと感じ、彼らの行為の成功に過度に関心を持っていました。

代わりに、常朝は真の武士が成功または失敗に関係なく、彼らの義務を果たすために躊躇せずに行動するべきであると感じました。

このロマンチックな感情はもちろん、歴史を通して侍によって表現されますが、それは戦争の芸術自体に反するかもしれません。

このアンビバレンスは武士道の中心にあり、おそらくそのようなすべての「侍の規範」に見られます。

伝統的な武士道の有機的な矛盾と、より「普遍的」または「進歩的な」定式化（山鹿素行のような）のいくつかの組み合わせは、20世紀の日本の悲慘な軍事的野心を知らせるでしょう。

国内外での最近の奨学金は、武士カーストと現代日本で発展した武士道理論との違いに焦点を当てています。

武士道は時間とともにかなり進化しました。

戦前の武士道は、多くの江戸時代の解釈よりも、天皇の役割を強調し、忠誠と自己犠牲の帝国の美德を重視していました。

徳川時代の学者で戦略家の山鹿素行（1622–1685）は、武士道、武士道（「侍の信条」）、およびより一般的なシドウ、すべての駅に適用することを目的とした「紳士の道」に関連する問題について広範囲に書いています。

宗光は、「純粋な」儒教に特に重点を置いて、一種の「普遍的な武士道」を成文化しようとしています。

価値観（新儒教の正統性における道と仏教の神秘的な影響を拒絶する）と同時に、日本と日本文化の特異で神聖な性質の認識を求めています。

階級や氏族に関係なく、天皇への究極の献身を含むこれらの急進的な概念は、彼を統治する幕府と対立させました。

明治時代から流行している武士道は、武士の属性を単純化したものだと考えてください。

侍はもともと、個人的な事柄とその家族や氏族の名誉のために戦った。

日本が統一されたとき、武士の役割には、治安維持、司法責任、インフラ整備、災害復旧、農地開発、医療行政、産業振興などの行政責任が含まれていました。

武士階級は1870年代に廃止され、その中で武士の役割は、近代的な国民国家の形成に焦点を当てて、より官僚的になりました。

社会階級の減少に伴い、天皇への忠誠など、いくつかの価値観が全人口に移されました。

作者の三島由紀夫は、「侵略主義や軍国主義は最初から武士道とは何の関係もなかった」と主張した。

三島によれば、武士道の男は、自尊心を持ち、自分の行動に責任を持ち、その責任を具現化するために自分を犠牲にする

人です。

戴季陶は、日本の近代化を可能にした明治維新の唯一の責任を武士に与えたが、大衆はそれを可能にただけだった。

ダイは、日本の戦闘傾向と軍国主義は、純粹に神の權威の概念を中心とした日本の社会宗教的迷信に基づいていると主張した。

それは中国やインドの思想には存在しませんでした。

武士道は政府や軍隊によって宣伝ツールとして使用され、彼らは彼らのニーズに合うようにそれを可能にした。

1882年の元の軍人勅書は、報国という言葉を使用しており、出生による国への債務の概念を意味します。

そのような債務は、肉体的または精神的な努力によって返済されなければなりません。

この考えは以前の武士道には存在しませんでした。

中国の作家周作人は、軍によって推進された武士道を高貴で古代の伝統の腐敗と見なしていました。

彼は、1935年のエッセイシリーズ「Riben guankui」で、切腹の行為と古い武士の慣習の重要性について論じた。

彼は、吉良を討ち取った後に切腹を宣告された赤穂浪士の物語と、物語の中で彼らの遺産を名付けました。

彼は、土佐藩の20人の武士が1868年にフランスの船員を攻撃したために切腹を犯した堺事件について話しました。

これらの例は、首相を暗殺した兵士に与えられた穏やかな罰と比較されました。

犬養毅は1932年に、伝統的な武士のように自殺して責任を負わなかったとして彼らを非難しました

1936年、周は第二次世界大戦の悪化の間に人類の喪失と伝統的な武士道の共感について書いた。

彼は、戦いの勝利者が敵の死体を尊厳をもって扱った例として、谷崎潤一郎の武士小説を具体的に指摘した。

武士道は、日中戦争での英国の中国侵攻を受けて、1800年代半ばに人気を取り戻し、日本の国民的表現と絡み合った。

1850年代から1860年代にかけて、日本では西洋人に対する外国人排斥が高まり、帝国復興の正当性が認められました。

この時期にテキストでの「武士道」の使用が増加し、その概念はより積極的に見られました。

1870年代に姿を消しましたが、1880年代に再び登場し、西洋文明の急速な導入による伝統的価値観の喪失と、日本の伝統を守るための新たな切迫感を表現しました。

1895年の中国に対する日本の勝利「軍事的成功の原点」とされていた武士道への誇りを取り戻した。

研究者のオレグ・ベネシュは、1880年代の英国の紳士の概念など、外国の刺激への反応として、近世のブシドの概念が変化したと主張しました。

新渡戸稲造の武士道の解釈は、以前の傾向をたどっていたものの、同様の軌跡をたどった。

この比較的平和な武士道は、日露戦争の頃にナショナリズムが高まったため、1900年代初頭から軍国主義者と政府によってハイジャックされ、適応されました。

起業家の福澤諭吉は武士道を高く評価し、学者の士気を維持することが永遠の命の本質であることを強調しました。

新藤稲嗣は明治天皇に彼の著書「武士道」を提出し、「武士道はここで繁栄し、コモを助け、国民のスタイルを促進し、国民が忠実な大臣の愛国的な美德に戻るようにする」と述べた。

彼は、武士道は男性と女性でわずかに異なる要件を持っていると書いた。

女性にとって、武士道とは、純潔を守り、子供を教育し、夫を支え、家族を維持することを意味します。

乃木希典将軍とその妻が明治天皇の死での殉死は、日本の道徳の衰退の傾向に対する反対の例として賞賛されました。

また、武士道の側面を復活させるべきではないと信じている人々からも批判を受けました。

明治維新後、小笠原流に代表される武道の工チケツトが普及しました。

武士道の影響を受けた武道と教育は、1941年以前に流行した民族主義の理想に対応していた。

武士道に触発された武道を通じて伝統を尊重することで、社会は相互に関連し続け、国の力のために先祖の慣習に対する社会の敬意を利用した。

研究者のウィリアム・R・パターソンによれば、「武道は、古代の武術を維持するのではなく、国民の精神を育むために使用できる伝統的な価値体系である武士道を維持する方法と見なされていました。

近代化の真っ只中に、日本人独特の日本的で、同胞としてそれらを統一することができるいくつかの伝統を保持するのに苦労していました。

例えば、嘉納治五郎は、「柔道は過去の武道に基づいて発展したので、過去の武道家が価値のあるものを持っているならば、柔道を実践する人はそれらすべてを伝えなければならない。

これら、今日の社会でも武士の精神を祝うべきだ」と語った。

第二次世界大戦の昭和日本では、武士道は軍国主義に使用され、戦争を浄化し、死を義務として提示しました。

武士道は、伝統的な価値観を活性化し、「現代を超越する」ものとして売り込まれた。

武士道は、兵士が最後まで戦うための精神的な盾を提供するだろう。

命令を出すとき、東條英機将軍は彼の指揮下で男性の顔を平手打ちし、顔を平手打ちすることは武士道の一部ではない家族から来た男性を「訓練する手段」であると言った。

国の緊急時のエッセイを934年3月に陸軍省が発表した。

それは日本が全体主義の「国防国家」になることを要求した。

それは上級将軍による15のエッセイを含み、武士道が日本人に優れた意志力を与えたので日本が日露戦争でロシアを打ち負かしたと主張し、彼らは生きたいロシア人とは異なり、死を恐れなかった。

第二次世界大戦が始まると、武士道の精神が呼び起こされ、すべてが国の堅固で団結した魂に依存することを促しました。

日本がアッツ島の戦いに敗れたとき、政府は、2000人以上の日本人の死を国の戦いの精神の感動的な叙事詩として描くことを試みた。

すべての日本船が関与するレイテ沖海戦の計画は、失敗した場合に日本を深刻な危険にさらすだろうという議論は、海軍が死の花として咲くことを許可されるという嘆願で反論された。

日本人は武士道の教化が彼らに優位性を与えると信じていました。

日本人は天皇のために死ぬことを切望していましたが、アメリカ人は死ぬことを恐れていました。

しかし、優れたアメリカのパイロット訓練と飛行機は、日本人がアメリカ人に追い抜かれたことを意味しました。

組織化された自殺攻撃の最初の提案は抵抗に会った。

武士道は侍に常に死を意識するよう求めたが、彼らはそれを唯一の目的とは見なさなかった。

しかし、絶望は受け入れをもち、そのような攻撃は武士道の真の精神として称賛されました。

武士道は降伏を臆病者に見なした。名誉を失い、尊厳と尊敬を失った人々。

日本が20世紀初頭に近代化を続けるにつれ、その軍隊は、日本の兵士、船員、空軍兵が武士道の「精神」を持っていれば、戦闘での成功が保証されると確信するようになりました。

その結果、武士道の行動規範は「彼の基本的な訓練の一環として日本兵に教え込まれた」ということでした。

各兵士は、天皇のために死ぬことが最大の名誉であり、敵に降伏することは臆病であったことを受け入れるように教え込まれました。

日本人に降伏した人々は、どれほど勇気を持って、あるいは名誉をもって戦ったかにかかわらず、侮辱に値するだけでした。

彼らはすべての名誉を失い、文字通り何の価値もありませんでした。

その結果、日本人が捕虜を射殺し、頭を下げ、溺死させたとき、これらの行為は、尊厳または敬意を持って扱われるすべての権利を失った男性の殺害を伴うため、免除されました。

民間人の抑留者は確かに捕虜とは異なるカテゴリーに属していましたが、武士道の信条から「波及効果」があったと考えるのは合理的です。

捕らえられた兵士や囚人を斬首する慣習は、14世紀以前の武士の文化に端を発しています。

日本のプロパガンダは、第二次世界大戦中に捕虜となった捕虜が虐待を否定したと主張し、武士道の寛大さのおかげで彼らはよく扱われたと宣言した。

囚人への放送インタビューは宣伝ではないと説明され、武士道だけが刺激することができた敵へのそのような同情に基づ

いて自発的に与えられた。

第二次世界大戦中、多くの日本の歩兵がグアムに閉じ込められ、連合軍に囲まれ、物資が不足していました。

数が多く、恐ろしい状況にあるにもかかわらず、多くの兵士は降伏を拒否した。

新渡戸稲造は、「武士道の法典を尊重し続け、激しい戦いに突入して殺されるのは簡単だと信じていた。

しかし、生きる権利があるときに生きるのは本当の勇気だ。そして死ぬのが正しいときだけ死ぬ」。

武士道は今でも日本の社会経済組織に存在しています。

武士の精神と美徳は、今でも日本社会に見られます。

著名な日本人は、武士道を彼らの文化の重要な部分と考えています。

特定の人々は生き方として武士道の側面を使用します。

武士道は日本の社会や文化の無数の側面に影響を与えます。

軍事パフォーマンス、メディア、エンターテインメント、武道、医学、社会福祉への影響に加えて、武士道コードは企業企業行動を促進しました。

それは、20世紀の資本主義活動を歴史的に構成した考え方です。

ビジネス関係、個人と彼または彼女が属するグループとの緊密な関係、日本のビジネス界における信頼、尊敬、調和の概念は武士道に基づいています。

したがって、これが現代日本の産業調和とイデオロギーの原点です。

これにより、1950~1960年代の戦後、日本の経済奇跡により、アジアの経済的リーダーとなることができました。

実業家の渋沢栄一は、将来に必要な武士道を説き、明治から大正までの日本企業の精神を提唱し、それが日本の経営の根幹となった。

藤村真也は、学術論文「サムライ倫理：企業行動のパラダイム」でサムライ倫理を検証しています。

武士道の原則は、急速な経済成長が現代の存在の目標である必要はないことを示しています。

関連して、経済的満足は、覇権的な国内総生産の統計に関係なく達成可能である。

藤村の言葉によれば、「伝統は国の企業文化に浸透し、その社会的発展の多くに情報を与えてきた」。

藤村は、武士によって実践された平等主義の原則が現代のビジネス社会と文化に浸透していると述べている。

名誉ある貧困、「セイヒン」のような原則は、権力と資源を持っている人々が彼らの富を共有することを奨励し、国の成に直接影功響を与えます。

武士道はまた、企業に社会的意味を提供します。

藤村氏は、「武士道がブームやバストを超越する道徳的目的で日本企業は家族のようなものであり、幹部が従業員を気

遣い、従業員が幹部を尊重しているとよく言われます。

武士道はその一部です。

国民のアイデンティティと帰属意識の基礎の、つまり日本人は一緒に一人であるという理想。

台湾では、武士道に対する前向きな見方が続いていました。

故李登輝総統の（1923-2020）のように、日本の伝統的な価値観を賞賛し、武士道が彼に影響を与えた。

日本の台湾では、Teng-huiは学校で剣道を学び、彼の将来の生活に大きな影響を与えた武士道と日本の武士道精神に深く影響を受けました。

彼は2003年の日本の本「武士道」を書いた。Precis：ノブレス・オブリージュとは何ですか？日本の侍精神に訴えることにより、経済停滞中の日本の士気を高めるために努力した。

武士道の七元徳を生かし、侍のコードを一新し、日本人の大人のカップルのコミュニケーションスキルの向上に貢献します。

2012年に作成された経験的文書「カップルコミュニケーションのための武士道マトリックス」は、カウンセリングエージェントが大人の内省を導き、パートナーと感情を共有するために採用できる方法論を特定しています。

この活動は「武士道マトリックスワークシート」（BMW）を中心にしています。

著者は、「武士道の美徳を実践することは、個人的な認識から始まり、カップルの認識にまで及ぶ、最終的には個人内および対人関係を強化することができる」と強調している。

マトリックスを利用するとき、カップルは7つの美徳の1つを特定し、それを彼らの生活におけるその普及を取り巻く過去と現在の認識に適用するように求められます。

個人がその特定の美徳を欠いていると彼らの関係を特定する場合、彼らは今、彼らの慈悲のためにその関係を含めることを考えるかもしれません。

武士道の精神は日本の武道に存在します。

現代の武士道は、護身術、格闘技、スポーツ、トーナメント、そして体カトレーニングに重点を置いています。

これらはすべて武道にとって重要ですが、もっと重要なことが欠けています。

それは自己啓発です。

武士道の芸術は、兵士たちに人生の重要な秘密、子育ての仕方、服装の仕方、家族や他の人々の扱い方、人格の育成の仕方を財政に関連することを教えました。

これらすべてのものは、尊敬される兵士であるために重要です。

現代の武士道は8つの美徳に導かれていますが、それだけでは十分ではありません。

武士道は、兵士になる方法だけでなく、人生のすべての段階を教えました。

武士道が描く侍は職業ではなく生き方です。

兵士になるために軍隊にいる必要はありません。

「侍」という言葉 必ずしも肉体的にではなく、何かのために戦っている人を指します。

人は彼の心、心、そして魂の中にあるもののために真の侍です。

他のすべては、それを完璧にするための作成における単なるツールです。

武士道は、一瞬一瞬を尊敬し、正直に生きることを意味する生き方です。

これはすべて、現在と過去の両方で、兵士の生活において非常に重要です。

本の中でカタ-武道の真の本質は？、サイモン・ドッドとデビッド・ブラウンは、武士道のスピリチュアリズムが武術「武術」を現在の「武道」に進化させると述べています。

彼らの分析のために、彼らは鎌倉時代をレビューして、武士道が武道の進化に及ぼした影響を繰り返し述べた。

彼らは明確に述べている。「明確にするために、武士道への言及は、鎌倉から明治維新以前（1868年以前）までの武術に関連しており、武道へのリンクは、武術の現代的な形態を指している。

この断言を補足するために、ドッドとブラウンは武術と武道の背後にある意味の違いについて話し合っています。

ドッドとブラウンの武道によると、伝統的な鎌倉時代の武道の原則の再開発です。

武道は、宗教倫理と哲学にルーツを持つ侍の道を定義します。武道の翻訳は、それを武士道の儒教と仏教の概念に結び付けています。

尊敬される空手の横田は、武術がどのように「戦うか殺すかの芸術」と見なされることができるかを説明し、戦場での生存に必要な「すべての犠牲を払って勝つ」という考え方を含みます。

逆に、武道は「生活または生活の芸術」と見なすことができ、武闘家が「正直かつ義にかなった、または少なくとも原則に従って生活することを可能にします。

弟子丸泰仙は、これらの両方の点を拡張して、武道の表意文字は「闘争をやめる」ことを意味し、「武道では、平和と習得を見つけることが重要であると報告しています。

居合道は、その伝達と実践において、武士道全体をエチケット、名誉の規範、服装、刀の持ち運び、そして敵ではなく自分自身との戦いによって取り上げる武道です。

剣道のような現代の格闘技は、武士道から哲学を引き出しています。

他の武道とは異なり、長時間の接触や複数のヒットは、体への単純でクリーンな攻撃を支持して不利になる傾向があります。

武士道はまた、合気柔術、合気道、合気武道、柔道、柔術、弓道、チャンバラなどの分野の名誉の規範に影響を与えました。

剣道は、剣禅一如をモットーにした武士道の精神を持っています。

哲学者の和辻哲郎（1889–1960）は、剣道は人生への執着から自分を解放することによって、人生を超越したレベルに闘争を起こすことを含むと書いています。

剣道は、エチケットの規範を厳格に遵守することにより、道徳的な指導を教え込みます。

道場には神棚があります。

剣道の基本的な態度は、基本的な感情を避けて高貴であり、目的は自己を征服することです。

武士道を生き方として使う人もいます。

例えば、日本の音楽家ガクトは、彼の哲学的な生き方は武士道に似ていると言った。

2011年、彼の武道アクション映画Bunraku（2010）についてのインタビューで、彼は次のように述べました。

日本人である武士道は私のルーツであり、私の国の文化の重要な部分です。

この美しい文化を世界と共有することが私の役割だと思います。武士道は私自身と職業上のキャリアの中で大きな部分を占めています。

武士道は私が考え、感じ、そして生きる方法の中核でもあるので、これは「武士道」が本当に意味することを世界に表現する絶好の機会だと感じました。

武士道を生活の中で利用している他の著名人は、例えば、台湾総統の李登輝（1923-2020）です。

2011年10月、スペインのアストゥリアス皇太子コンコード賞が、福島第一原子力発電所事故、別名フクシマ50の英雄に授与されました。

彼らは、「日本社会に最も深く根ざした価値観を具現化した」行動と、自己犠牲を伴う「勇気と模範的な行動」を称賛された。

これはメディアによって「サムライスピリット」と評されました。

自衛隊（JSDF）は、1868年から日本帝国の軍隊の後継者です。

JSDFは、1954年に自衛隊法（法律第165号）によって正式に設立されました。

日本国憲法第9条の制限により、主に国防に使用されている。武士道は、たとえば、Exercise Bushido Guardian（2019）などの戦闘演習の名前でのみ象徴的に使用されます。

JSDFに武士道を導入することには支持者と反対者がいる。

2000年以降、多くの将官が武士道の重要性を講演で宣言してきました。

武士道は、軍隊を「勇気」、「規律」、「正直」などのスローガンと結び付けるのに役立ちます。

荒谷卓は、JSDFの最初の特殊部隊を設立した作家、武道家、そしてJGSDFのベテラン（1982-2008）です。

荒谷は2015年の本「戦う者たちへ：日本の大義と武士道」を書いた。

彼は、千年以上にわたって作成された武士道の本質を説明し、武士道で兵士を訓練することの重要性を強調している。

彼は、日本の武芸の目的は他の人々を殺すことではなく、彼らの悪霊を浄化し、共存と繁栄への道を開くことであると主張しています。

彼は、武士道で兵士を訓練することによって、彼らは最強の戦闘特殊部隊になることができると言います。

彼は、JSDFメンバーが武士道を受け継いで勇敢で威厳のある生活を送ることを望んでいる。

武士道の行動哲学を使用することにより、彼らは技術的にだけでなく精神的にも強くなることができます。

一部の批評家は、武士道を過度に称賛することで、旧日本軍の過ちを繰り返す可能性があるとして述べています。

IJAの古い日本軍将校の訓練は、科学的能力ではなく、火の下での勇気（暴行）を強調した。

これは兵士と将校の間に緊密な連帯を生み出したが、将校は兵士が持っていなかったスキルを欠いていた。

日本軍は、長期的な忍耐力ではなく、勇敢で精神的な価値で死ぬことを非常に重要視している。

これは、「現実を無視する精神性への傾向」をもたらした。

この精神JSDFに存在します。

武士道の勇気で忠誠を勝ち取るために将校を兵士のように振る舞わせることで、睡眠不足を引き起こします。

宇宙戦争やサイバー戦争などの現代戦争にとって、それが重要であるかどうかについては論争があります。

理想の兵士になれないことを謝罪するために切腹を犯した警察予備隊（1950-1954）のメンバーのケースがありました。

これは無駄な命の損失でした。

別の例は、戦術を変更するのではなく攻撃を繰り返すために演習に失敗した若い戦隊司令官でした。

戦前の大日本帝国海軍の研究者アレクサンダー・キラルフィは、日本の考え方は主観的であり、無関係の海事問題を学術的に分析することに関心がないと述べた。

主観的で近視眼的な議論は、賢明な戦略を生み出しません。

経営幹部の理想的なイメージは、時代と戦略的環境に応じて変化するはずです。

したがって、封建的な武士道は、現代の戦略的環境や文化に適合しない可能性があります。

批評家は、軍が武士道のためではなく、プロの軍事組織であったために、清とロシア帝国陸軍を打ち負かしたと主張している。

したがって、武士道は自衛隊全体の価値になるべきではありません。

むしろ、国益を達成するために、JSDF幹部の理想的なイメージを定義する必要があります。

歴史を通じて複数の武士道タイプが存在してきました。

禅仏教、神道、儒教などの影響や、社会や戦場の変化により、コードは変化しました。

一貫した理想は、運動、軍事スキル、勇気を含む武道です。戦闘中の敵に対する恐れを知らないことです。

武士道は、各時代の武士がその存続のために追求した道です。

昔の武士道の武士道は、能力を発揮して他人を圧倒するという考えが特徴です。

当時の武士は「つわもの」と呼ばれていました、これは、強くて勇気のある人、1つの武器で戦う人（特に強い侍）を意味します。

彼らは大きな影響力を持っていた。

源平戦争（1180-1185）は、古代の武士道タイプの典型です。

古い侍は現代の武士の道徳について話しませんでした。

例外は慈悲の気持ちと自然な気持ちです。

焦点は、土地を統治し保護する力によって他の人々を圧倒することでした。

実質的な側面が重要でした。この時の武士は恐ろしくて純粋な戦いでした。